18

## 暮尾

それである。 
それである。 
『新日本文学』昭和四七年六月号の山本祐興「"状況"のなかの自我――金子光晴の抵抗と文学」がおもいがつきまとう文章がある。 
『新日本文学』昭和四七年六月号の山本祐典

この文章にはまず"状況"認識にかかわる誤りがあるうえに、その、"誤り"をとっこにとっての強引すぎる論理の展開がある。しかもその"状況"とは、筆者山本の、ほぼ一五~二○歳の期間にまたがっているのである。私見になるが、少なくとも自分の生れあわせがっているのである。私見になるが、少なくとも自分の生れあわせがあるほど、人間はよほど慎重に筆をはこばなければならない。一見、結構がととのっているようにはみえるが、山本の一文は、その見、結構がととのっているようにはみえるが、山本の一文は、その意、結構がととのっているようにはみえるが、山本の一文は、そので通らない箇所が多すぎるのである。

い。」と批評した金子光晴の「落下傘」全文を以下にあげる。 鼓舞する 作用を もってしまうことを、 考慮しないわけには いかなを訴える確率よりは、むしろ作者の意図とはまったく逆な、時流をを訴えるの便のために、山本が「その人をとおして、自由主義の存在

ちこんでゆくこの速さは/なにごとだ。/なんのあやまちだ。 / 一 落下傘がひらく。/じゅつなげに、/ 一が花のやうに、しをれもつれて。/ 一/電や/雷の/かたまる雲。/月や虹といふこの淋しさだ。/ 一/電や/雷の/かたまる雲。/月や虹といふこの淋しさだ。/ 一/電や/雷の/かたまる雲。/月や虹といふこの淋しさだ。/ 一/電池のや高。/ / 落下傘がひらく。/じゅつなげに、/ 一/旋道のや高。/ / 落下傘がひらく。/じゅつなげに、/ 一/旋道のや高。/ / 落下傘がひらく。/じゅつなげに、/ 一/線道の映る天体を/ はるかにことだ。/なんのあやまちだ。

=

/ひもじいときにも微笑む/躾。/さむいなりふり/有情な風祖のむかしから/女たちの貞淑な国。/ /もみ殻や、魚の骨。さいはひなるかな。わたしはあそこで生れた。/戦捷の国。/父この足のしたにあるのはどこだ。/……わたしの祖国!/ /

物。/ /あそこには、なによりわたしの言葉がすっかり通じ、かほいろの底の意味までわかりあふ、/額の狭い、つきつめた眼光、肩骨のとがった、/なつかしい朋党達がゐる。/ /「もののふの/たのみあるなかの/酒宴かな。」/ / さくらしぐれ。/柱。/草ぶきの廂にも/ゆれる日の丸。/ /さくらしぐれ。/おきものの富い。

Ξ

悲しいことになりませんやうに。」
悲しいことになりませんやうに。」「神さま。/どうぞ。まちがゆらりゆらりとおちてゆきませんやうに。/足のしたが、刹那にかかなく、ふるさとの楽土につきますやうに。/風のまにまに、海びなく、ふるさとの楽土につきますやうに。/風のまにまに、海びなり、ふるさとの楽土につきますやうに。/風のまにまに、海がらりゆらりとおちてゆきながら/目をつぶり、/双つの足うら

してみたい。」といい、まことに奇怪な論理を繰りひろげていく。は、「治安維持法の適用を意図している、検閲官憲の立場からしる公論』昭和一三年六月号に掲載された。このことに関して山本祐興との金子の反戦・抵抗の詩(発表という行為による)は、『中央

との国への讚歌と、三章での神への祈念が、この国への帰属を切々やまちだ。〉との不安におののいていたとしても、 二章にあやなすい落下傘の降下が、たとえ 〈だが、どこへゆくのだ。……なんのあ山本検閲官はいう。「一章において、孤独な淋しいそして頼りな

らにつづける。
と願望しているうえは、一種の愛国詩であるといえる。」山本はさ

の常識においては、このような解釈こそ至当なものであって、コミの絶対的支持によって、いよいよ強固なものになっていく国民コミの絶対的支持によって、いよいよ強固なものになっていく国民で、企業を表育のすべてにわたり、徹底的に涵養した愛国心が、マス・「この推測には、了解される自然さがある。というのは、学校教育

「この詩は金子氏自身がいうように〈反戦詩であるにもかかわら「この詩は金子氏自身がいうように、寛大であり、また疎漏であるようが、当局の目をぬけ〉(『現代詩入門』)たのではなく、検閲官憲のが、当局の目をぬける〉ように、寛大であり、また疎漏であるようわれる。〈目をぬける〉ように、寛大であり、また疎漏であるようわれる。〈目をぬける〉ように、寛大であり、また疎漏であるようが、当局の目をぬけ〉(『現代詩入門』)たのではなく、検閲官憲のが、当局の目をぬけ〉(『現代詩入門』)

これくらい筋の通らぬことを書かれると、どこかしら堂々とみえてもくるから、活字とは不思議なものだ。 山本の 論理にしたがうてもくるから、活字とは 不思議なものだ。 山本の 論理にしたがう 大部 は表の高揚に益すると判定し、発表を許可したことになる。な が、昭和十年代という状況のなかにおくと、この詩は結果的には国が、昭和十年代という状況のなかにおくと、この詩は結果的には国が、昭和十年代という状況のなかにおくと、この詩は結果的には国が、昭和十年代という状況のなかにおくと、この詩は結果的には国が、昭和十年代という状況のなかにおくと、どこかしら堂々とみえば、日本によりには、山本によれば、日本のは、山本のではないたのではないからである。これはほんとうのことだろうか。そんなにも文学通の、しかもてもくな策をろうする検閲官か、あの国家総動員法下に存在してこしゃくな策をうする検閲官か、あの国家総動員法下に存在してこしゃくな策をろうする検閲官か、あの国家総動員法下に存在していたのだろうか。

さてここで、わたしは「国民の常識」というさいの山本の、かな

二面の見出しを二、三書きぬいてみる。 に、当時のマス・コミである『東京朝日新聞』昭和一三年六月一日りの程度の 状況認識に関する 誤りについて 指摘したい。 そのため

突入一「我は九機、敵は五十機/漢口上空廿機を撃墜/壮烈無比密集へ

「武道教師の資質向上/学務課長論議」「敵の牙城武漢三鎮/奥地の三都スクラムの防陣」

の冒頭の詩、河井酔茗「二神出征」の第三連を引用してみる。

また翌一四年刊行の『戦争詩集』(東京詩人クラブ編、昭森社)

のら/まさに見きといひ伝ふ。とどろかせ、あらがねの/岩根も裂けむ御姿を/皇。国のつはもとどろかせ、あらがねの/岩根も裂けむ御姿を/皇。国のつはものら/まさに見きといひ伝ふ。

同じく山本和夫「愛児に送る手紙」の最終連から引用する。

きたい。果してこれは山本の批評のように「時流を鼓舞する作用を読者の方々よ、ここでいま一度「落下傘」を静かに読んでいただあり、国民の常識でもあったのですよ、山本さん。

因することではない。――「額の狭い、つきつめた眼光の」検閲官のすることではない。――「額の狭い、つきつめた眼光の」検閲官とは調子がちがってなじめないし、よくわからない、くらいのとことは調子がちがってなじめないし、よくわからない、くらいのとことは調子がちがってなじめないし、よくわからない、くらいのとことは調子がちがってなじめないし、よくわからない、くらいのとことは調子がちがってなじめないし、よくわからない、くらいのとことは調子がちがってなじめないし、よくわからない、くらいのとことは調子がちがってなじめないし、よくわからない、くらいのとことは調子がちがってなじめないし、よくわからない、くらいのとことは調子がちが、わたしらにとり問題になるのは、あくまでも文学としての質に発するものであって、決して受け手の数や確率の問題に基ての質に発するものであって、決して受け手の数や確率の問題に基でにいうが、わたしらにとり問題になるのは、あくまでも文学としての質に発するものであって、決して受け手の数や確率の問題に基でにいる。

詩人であったと、後代のわたしは評価する。)
論』誌上に発表してくれた金子は、そのときたしかに反戦・抵抗のたいを、「落下傘」の微妙な言いまわしでみごとに表現し、『中央公たいを、「落下傘」の微妙な言いまわしでみごとに表現し、『中央公が、一切の反国家思想を取りしまり、点をかせごうとしていたであが、一切の反国家思想を取りしまり、点をかせごうとしていたであ

ここでもう少し山本の論理とわたしの反論についてはっきりさせるならば、山本は「落下傘」における金子光晴の反戦の意図をまるをり頭から否定しているのではなく、その社会的効用において、会手が「落下傘」を指して自ら戦後解説したように「この詩によって、当時、鼓舞された人(山本とは逆の意味で――暮尾)もあった。そのイミで自由主義の消えなんとす法灯をつなぐことに、イミはあったようだ。」(『現代詩入門』)ということは認めがたいといっているのだ。それに対しわたしは、反証をあげて、山本のいう意味では「落下傘」は「時流を鼓舞する作用をもってしまう」詩ではなかったというまでである。

山本はこうもいう。

くるというおおきな飛躍がある。」得ないとすれば。そこには、ルイ・アラゴンたちの世界がひらけて「もしかりに抵抗表現への情熱が、否定しても否定しても消失させ

のについて 考えなおして みるべきだ。 たとえば フランスの植民地ごとく、「時と場所」に歴史を加えて、もう一度時代状況というも日本語で詩を書いていた戦争中の一民衆である。山本は自らいうがレジスタンスと日本の状況はちがったのだ。金子光晴は島国日本でレジスタンスと日本の状況はちがったのだ。金子光晴は島国日本でしたなるとをいまさらいってもしょうがないのだが、フランス・

スを占領したナチスと手を結んでいたことを。撃をうけるまえまでの日本人の一途な必勝の気分を。日本はフラン撃、フランス革命やパリ・コンミュンを。さらに日本国土が直接爆

また山本は「鮫」や「落下傘」は「真実」から遠いという。なぜまた山本は「鮫」や「落下傘」は「真実」から遠いと私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、と私はおもを、一行たりともその表現方法に選択すべきではない、とればおもない。

とをわたしは明らかにしておきたい。の詩において、心ある民衆から真実を隠すために擬態を示したろうの詩において、心ある民衆から真実を隠すために擬態を示したろうちがえているようにおもえてならない。金子光晴は、果してそれらちがえているようにおもえてならない。金子光晴は、果してそれらちがえているようにおきたい。

引いて文学を鑑賞したりすることには反対である。書いてしまったような気がする。)わたしは、原則的に、状況を割傘」に感動してないし、感動しない自分をつきつめずにこの評論をも、文学としての感動を覚えるものの一人なのだ。(山本は「落下も、文学としての感動を覚えるものの一人なのだ。(山本は「落下れたしは山本とはちがい、「鮫」にも「落下傘」にも「富士」に

のである。 ただ、 当時の権力に 強いられたことばの 状況のなかで「真実隠蔽」の「擬態」を見いだしたりすることはとてもできないしたがってわたしの感性は、金子のそれら戦時下発表の詩から、

のではつまらなすぎて、それとはちがうわたしなりのイメージをあのではつまらなすぎて、それとはちがうわたしなりのイメージをあのであり(山本はそのことを「真実隠蔽」の「擬態」という)、そのであり(山本はそのことを「真実隠蔽」の「擬態」という)、そのであり(山本はそのことを「真実隠蔽」の「擬態」という)、そのであり(山本はそのことを「真実隠蔽」の「擬態」という)、そのである。正直なところ、わたしはそれらの詩のことばが、具体的に金子の本意とどうかかわっていたかは、金子自身が後年述べたものを読んではじめて知る面が多かったし、いまでも金子が明かしたのを読んではじめて知る面が多かったし、いまでも金子が明かしたのである。正直なところ、わたしはそれらの声が、異体的である。正直なところ、わたしはそれらの声が、とわたしは考えとも、との本質においては現在もそう変わっているわけではないが)、発表の本質においては現在もそう変わっているわけではないが)、発表のではつまらなすぎて、それとはちがうわたしなりのイメージをあのではつまらなすぎて、それとはちがうわたしなりのイメージをあるではつまりでは、ないのではつまない。

し、文学批評上での初歩的な誤りをおかしている点にある。『真実』ということと詩的真実という ことに ついて、 両者を 混同つまりわたしの判断では、山本の一文の大きな欠点は、いわゆる

たためつづけているものもある。

などといってしまうのだ。 
までは、プロレタリア詩論の 共通の方法的地点にたっている。」 
意味では、プロレタリア詩論の 共通の方法的地点にたっている。」 
意味では、プロレタリア詩論の 
共通の方法的地点にたっている。」 
を愛国詩を選んだ」(『日本の芸術について』)という箇所をひいて、「この 
詩を選んだ」(『日本の芸術について』)という箇所をひいて、「この 
詩を選んだ」(『日本の芸術について』)という箇所をひいている。」

るために」詩を書くことと、プロレタリア詩の方法とは、同じに論ために詩を書いたことなどはないし、もともと「ある政治に抵抗すわたしの知るかぎりでは、金子光晴はブルジョアジーを『倒す』

結局は抵抗を示すであろう。 治」であるならば、プロレタリアートの手による政治に対しても、じられる性質のものではない。 おそらく 金子光晴は、 それが「政

その意味では金子が詩人と呼ばれる所以は、徹底して自らを自らたの意味では金子が詩人と呼ばれる所以は、徹底して自らを自らためにのみ詩を書きつづけているところにあり、大東亜戦時かのようにみえた側面においてではなく、一人の自我が、全体を軽かのようにみえた側面においてではなく、一人の自我が、全体を軽かのようにみえた側面においてではなく、一人の自我が、全体を軽かのようにあり、大東亜戦時ある。

山本は昨今の金子光晴を指して、「かぎりなく遍歴する神のない山本は昨今の金子光晴を指して、「かぎりなく返れている。子光晴を指して、「かぎりなくに気づくにちがいるくとも神のあるエゴが、階級的視点にたつアクチュアルな展望にのみ存在しており、そこを活路とするとき、はじめて未来が語り得ることに気づくにちがいない。」ともいうが、ここには、政治的効用を文学の上におく、古ない。」ともいうが、ここには、政治的効用を文学の上におく、古ない。」ともでうと結びつく、スターリニズム的な観念世界よりは。

反戦抵抗を断念した地点から存在することになるが」「現状変革へを戦抵抗を断念した地点から存在することになるが」「現状変革へうな急変ぶりなのだ。」という一文を例にひき、「金子氏の 戦後は、争が終れば、一億一心で、みんなアメリカ人にでもなつてしまひさ争が終れば、一億一心で、みんなアメリカ人にでもなつてしまひさ争が終れば、一億一心で、みんなアメリカ人にでもなつてしまひさうな急変ぶりなのだ。」という一文を例にひき、「金子氏の戦後は、反語とか遊説的表現をよく理解しな最後になるが、山本祐興は、反語とか遊説的表現をよく理解しな

とを発見」できず、疑問は氷解したと書いている。の根源的前提の指摘などには、金子氏がどこかの時点で変貌したこ

自我と文学の問題が、 またもや 妖しげに 顕現して きているのであ た。そこに、老年にいたった金子光晴の、戦後現代の状況における としては、敵はしだいに詩人金子光晴には対峙してはこなくなっ らなかった。しかも戦時下のように、目に視えるほどの巨大なもの することにより維持する道程を、よりいっそうに歩んでいかねばな 後のはやい時期に、金子は戦争中とおなじ日本人の心性を民衆にみ は敗戦後のいっとき、金子は柄にもなく、個→共同→個などという ろんそれは反戦・抵抗を断念したなどということではなく(わたし れていることなどをもあわせて考えると、ほぼ見当がついてくる面 「泥の本」『風流尸解記』であると、わたしは考えるものの一人で うちにとらえてしまう見者の座を、たえず現実社会での自らを解剖 末観的絶望とニヒルを肉化し、戦争も人類もことばのぶんまわしの 一億二心ということにしてもらおう。」(自伝『詩人』昭和三二年刊 いだし、「一億一心という言葉が流行っていた。それならば、僕は、 サイクルの発想をしかけたことがあるような気がしてならない)戦 もあるのだが、金子は戦後すぐに向きを転じているのである。もち にも似たかげりを感じさせる「短章三編」の一つとして書きかえら マ」が、詩集『落下傘』(昭和二三年刊行)では、ある自嘲的絶望 これについては、たとえば『戦争詩集』に金子光晴が寄せた「タ その一方の極が『若葉のうた』『愛情9』であり、もう一方が しかしそれゆえに金子は、生存の苦さを内側へのバネとして終 という 戦時下の自我に、 すばやく 舞いもどろうとしたのであ

#### 付記

この原稿は七月二日に書き、『新日本文学』に投稿しましたところ、"新日文"から、やや感情的になっているとおもわれる字句を行なったうえで再送付し、七月中旬に九月号には掲載するであろうという意向を聞きました。しかし九月号は雑誌のスペースの関係らいうことで、また十月号も同じ理由で見送りとなり、わたしはようやく十一月号に掲載の約束を得ることができました。この間に山方やく十一月号に掲載の約束を得ることができました。この間に山方やく十一月号に掲載の約束を得ることができました。この原稿は七月二日に書き、『新日本文学』に投稿しましたとことの原稿は七月二日に書き、『新日本文学』に投稿しましたとことの原稿は七月二日に書き、『新日本文学』に投稿しました。

ゲラ刷十通とともに原稿は返却されてきました。 ところがこの九月、山本氏が急逝され、「情において忍びたい」ところがこので考えてほしいとの連絡を 新日文\*からうけましたので、わたので考えてほしいとの連絡を 新日文\*からうけましたので、わたので考えてほしいとの連絡を がおした。

意により発表の機会をもたせていただくことにいたしました。たと判断し、自らの弱さを反省しつつ、ここに『黒の手帖』のご好い、山本の論文は現在の状況においてはそのような内容を含んでいおいてもなお責任を 問われつづける 性質のもので あることを おもおいてもなお責任を 問われつづける 性質のもので あることを おもおいてもなお責任を 問われつづける 性質のもので あることを おもおいてもなお責任を 問われつづける 性質のもので あることを おも

# 困難な地平への単独行

-大沢正道『ロマン的反逆と理性的反逆』評―

## 台 寺 晋

蓮

#### 戦線離脱の書

おいがたく、その根はすこぶる深い。 七二年夏――われわれの戦線の混迷はお

の、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみてよいに 根底から 異議申立てを つきつけらともに 根底から 異議申立てを つきつけらともに 根底から 異議申立てを つきつけられ、アナーキーな叛逆が世界的に噴出したアナ連解散によって名実ともに終焉したのアナ連解散によって名実ともに終焉したのアナ連解散によって名実ともに終焉したのアナ連解散によって名実ともに終焉したのである。六八年がひとつのエポックをなしたことの、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみてよいの、の三者へと分解していったとみでよいる。

主体的質の脆弱性をも物語っているのだ。それでは、権力の熾烈な弾圧を直接的契機とするが、同時にわれわれの主体的力量、否、るが、同時にわれわれの主体的力量、否、が、いずれも今日その総括を問われているが、いずれも今日その総括を問われているが、いずれも今日その総括を問われているが、いずれも今日その総括を問われているが、いずれも今日その総括を問われているが、いずれも今日その総括を問われているが、いずれも今日その総括を問われているが、いずれも今日をも物語っているのだ。

として指摘し、新たな展開を期待した方向しまった。前著を評した際に、今後の課題だが、一読して、私はいささか当惑して

ある。

本書について、氏は「現代革命に正面か本書について、氏は「現代革命に正面からアプローチした」試論集であり、前著らアプローチした」試論集であり、前著らアプローチした」試論集であり、前著らアプローチした」試論集であり、前著らアプローチした」試論集であり、前著らアプローチした」

持ち時間をもっと集中すべきであった。他「自由論、国家論等の理論的展開」に自分の「自由論、国家論等の理論的展開」に自分のいうものはどのようにしてやらなくては、いうものはどのようにしてやらなくては、いらものはどのようにしてやらなくては、第一に、氏自身が『反国家』を「仕事と

の、柄に合わないことを打ち切るべきであった、と思う」と述懐していたように、氏った、と思う」と述懐していたように、氏の問題意識が「ますます原理的分野に傾斜している」(『全体革命への序説』あとがき)ことによるものだろう。ジャンルの相違、ある。だが、それが、単なる相違ではなく、あ。だが、それが、単なる相違ではなく、あ。だが、それが、単なる相違ではなく、おばか――あらためて頁を操ってみると、氏は読者の反応を予見したように、次のように述べていた。

「……日本の左翼運動には目前の戦略・戦「……日本の左翼運動には目前の戦略・戦略を亡亡。……)のみが要求され、闘う主戦術を亡亡。……)のみが要求され、闘う主難脱、『ある孤独』の保持は否定される。離脱、『ある孤独』の保持は否定される。離脱、『ある孤独』の保持は否定される。の以上、際限のない後退は、ありえても、の以上、際限のない後退は、ありえても、前進の一歩はありえないだろう」

めてきた感のある評者にとって、これはひも、もっぱら「前線で役に立つ武器」を求。ある孤独』の保持を全面否定しないまで

れた気がしたのである。

逆に、本書を『戦線離脱の書』と割切ってみれば、別に苛立つこともないわけである。はじめからもう少し冷静に読めばよかったのだが、私は、こうして本書を意識的に突離してみて、ようやく氏のモチーフがに突離してみて、ようやく氏のモチーフが

## 屈折の根拠を理論的に究明

ようとするのは無理だったのである。『反国家』と本書の間には、明らかにある『反国家』と本書の間には、明らかにあるのがある。だから、『反国を別している。

ぼくは足もとの大地ががらがらと崩れ去っつ真実を、現実にしたたか経験したとき、いうハーバート・リードの辛辣な言葉がもの多くは無意識的な権威主義者である。との屈折について、氏は「"アナキスト

ていることであろう。
でいることであろう。
でいることであろう。

か」と、より普遍化すると共に、通時的な よってはより強力な権力をすら導きだすの が、なぜ権力の死滅を招きよせず、場合に に結びつかないのか。権力への激烈な反逆 析され、通時的側面が軽視されていたとい なのだが、そこでの結論は後に修正される 緊張関係を保ったスケールの大きな好論文 独自の現状分析を駆使し、イデオロギー的 で革命的暴力とは何かが論じられている。 力の本質が追求され、現代の反乱との関係 事件の分析から階級的視点を貫きつつ、暴 そうした体験の一部をなすと思われる暴力 たIの〈甦る革命的暴力〉では、おそらく いし歴史的側面の分析へと傾いたようであ 問題を「大反乱がなぜ大革命へと、必然的 うことであろうか。その後、氏の関心は、 ことになる。 主要に問題の共時的側面が分 本書のなかでもっとも早い時期に書かれ

関連で考えると、すこぶる重大である。関連で考えると、すこぶる重大である。この方法的意義は、アナキズムとの歴史観が、それぞれ探究されているわけで届〉では、クロポトキンを媒介して新たな相〉では、クロポトキンを媒介して新たな相〉では、クロポトキンを媒介して新たな相〉では、クロポトキンを媒介して新たな相〉では、クロポトキンを媒介して新たな相〉では、クロボーを表し、関連で考えると、すこぶる重大である。関連で考えると、すこぶる重大である。

題を主体的に切開すれば、おそらく、 たのではないか。(アナキストの転向の問 採るといった矛盾する倫理主義に陥ってい 法的武器を欠いていたために、民衆に対し のである。従って、権力の拒絶はできて 歴史的に形成された権力構造の分析がない 変革しきれない欠陥を伴いがちであった。 とに正当ではあるが、それのみでは現実を 応のようなものであって、その限りでまこ れば、実存的観点からする権力への拒絶反 意識が皆無に等しかった。それは、いうな 的にこの欠陥にぶつかると思う。) ては性善説を、権力者に対しては性悪説を あった。歴史的分析を行なったものも、方 従来のアナキズムには、このような問題 廃絶を現実的に展望しきれない弱さが

> 出したのである。 大沢氏は、こうした欠陥を克服すべく、

## 国家へ回帰するロマン的反逆

たい、 これでは、 人口マン的反逆と 理性的反逆〉 について 簡単に 紹介反逆と 理性的反逆〉 について 簡単に 紹介し、若干の感想を述べてみたい。

そこで、著者は、ダダイストからアナキストになり日本国家に激烈な反逆をした詩ストになり日本国主義を讃美するに至ったのか、と日本帝国主義を讃美するに至ったのか、と日本帝国主義を讃美するに至ったのか、と日本帝国主義を讃美するに至ったのか、と日本帝国主義を讃美するに至ったのか、という問いから出発する。「それは、たんにいう問である。のみならず、それは一九いる問題である。のみならず、それは一九いる問題である。のみならず、それは一九いる問題である。のみならず、それは一九いる問題である。

らなかった。反逆のいっさいのよりどころ実とは異質のロマンにしたてなければ」な衝動を素朴に信じて全肯定し、「それを現成の質に――「ロマン的反逆」と規定さんがある。 では、自己の内的がある。 では、自己の内的がある。 では、自己の内的がある。 では、自己の内的がある。 では、自己の人がある。 では、自己の人がある。 しょう はいっさいのよりどころ

く」経験を読み取っているのだ。
く」経験を読み取っているのだ。

これだけの指摘にとどまるなら、公自己変革の不徹底〉あるいは〈現状分析の甘さ〉といった既成のことばで括ることもでき、いわゆる転向論の枠内におさまってしまったであろう。しかし、著者は、そうした個人の資質や努力に問題を還元する論法に個人の資質や努力に問題を還元する論法に個人の資質や努力に問題を還元する論法にいる。なぜ、内的衝路ることなく、執拗に、より普遍的な問題的全的肯定がそのまま解放へつながらないのか――そのメカニズムを明らかにしよいのか――そのメカニズムを明らかにしよいのか――そのメカニズムを明らかにしよいのか――そのメカニズムを明らかにしよいのか――そのメカニズムを明らかにしよいのか――そのメカニズムを明らかにしよいった。

〈性格層〉と〈生物学的な核〉と呼ばれる奪的・嫉妬深い衝動などで構成される〉を媒介する〉〈残酷で加虐的・好色的・略を媒介する〉〈残酷で加虐的・好色的・略を媒介する〉〈残酷で加虐の表層と深層と深層といる。

イヒの性格形成論である、という。
〈最深の第三層〉の積みかさねとする」
ラ

ティヒによれば、最深層に由来するすべライヒによれば、最深層に由来するすべての〈自然的、社会的リビドー衝動〉が、ての〈自然的、社会のリビドー衝動〉が、での、自然的、社会のリビドー衝動〉が、がが、「従来の観念によれば、二次的性格だが、「従来の観念によれば、二次的性格だが、「従来の観念によれば、二次的性格が対峙するものと、単純に理解されていが対峙するものと、単純に理解されている。

「表層を形成する法―社会秩序、……という抑圧物がとりのぞかれれば、抑圧されてりれた深層の自然な秩序=社会を形成するでいた深層の自然な秩序=社会を形成するでいた深層の自然な秩序=社会を形成するでいた深層の直然なれた人間の心は自然な生物性がかりにのぞかれたとしても、国家の抑性から解き放たれた人間の心は自然な生物がかりにのぞかれたとしても、国家の抑性がの解き放たれた人間の心は自然な生物がかりにのぞかれたとしても、国家の抑性が、四~六、〇〇〇年にわってつくりあげい。四~六、〇〇〇年にわってつるのだ。

必然的にこの反社会的な二次衝動のなかにたままでおけば、国家にたいする反逆は、たしこの性格構造の病理的性格を放置し

かざるをえない」 収斂され、……結局、国家へと回帰してい

在出な引用のしかたで恐縮であるが、著の問題意識の高さ、苦闘の対象を窺い知るには格好の個所であろう。萩原のような個人のみならず「世界史的にはロシア革命がその典型」であるというのだから、問題がその典型」であるところは重大である。 おい、その意味するところは重大であるが、著

これによって著者は、かつてバクーニンで行き着こうとしているかにみえる。 これによって著者は、かつてバクーニンが予見し、アナキストたちが十分な理論的が予見し、アナキストたちが十分な理論的である。という事だけである。という事にが、革命運動――少なくともアナキズムをあい、革命運動――少なくともアナキズムをおい、革命運動――少なくともアナキズムをおい、革命運動――少なくともアナキズムをおい、革命運動総体に対する否定にまった。

底的な懐疑の対象となるのは、けだし当然革命運動は、全否定とはいわぬまでも、根を法ー社会秩序の破砕へ集約しようとするを法ー社会秩序の破砕へ集約しようとするをはいれるまでも、根を法ー社会秩序の破砕の彼方に夢見られて

であろう。

者は考える。 と評者は考える。

### 実存的観点が後退

ている。「いま要請されているのは、……第一は、この底知れぬ性格構造の病理的性第一は、この底知れぬ性格構造の病理的性第一は、この底知れぬ性格構造の病理的性第一は、それと併行して〈生物学的な核〉に発は、それと併行して〈生物学的な核〉に発は、それと併行して〈生物学的な核〉に発は、それと併行して〈生物学的な核〉に発しているのは論が導き出されること、である」

《全体革命の眺望》では、認識の変革の提事物のうちに内在している原理としての理事物のうちに内在している原理としての理性に全的な信頼を託し、理性の光の下に歩みを進める」ことが語られ、さらに、VI みを進める」ことが語られ、さらに、VI のでは、まルクハイマー以下、その方途に関し、ホルクハイマー以下、その方途に関し、ホルクハイマー

り具体的なイメージが展開されている。起とともに〈全体革命の種々相〉としてよ

ついていけぬ部分であった。 注いでいるのだが、私には、すんなりとは

この辺りから急に抽象的ないし比喩的にこの辺りから急に抽象的ないのだが、方法的問題に限っていえば、いちばん気になるのは、次の一節にみられるよば、気になるのは、次の一節にみられるような、分析主体と実践主体の分裂(?)で

だけは確保しておきたい」(傍点-引用者)すかである。とすれば、われわれはやはり、すかである。とすれば、われわれはやはり、すかである。とすれば、われわれはやはり、がいいのかもしれない。しかし、それならば、せめて観客の座ない。しかし、それならば、せめて観客の座がけば確保しておきたい」(傍点-引用者)

分裂し、その分裂をつなぎとめる論理が客部分の論理は、やはり一種の客観主義に陥っているのではないだろうか。誤解のないようにいえば、結論が実践的でないというようにいえば、結論が実践的でないというとが直接問題なのではなく、そこに至ることが直接問題なのではなく、そこに至ることが直接問題なのではなく、そこに至ることが実践的態度であると考えているのかもしれないが、傍点あると考えているのかもしないが、

観主義なのではないか、ということだ。

を集団に無媒介にアナロジーすることにもを集団に無媒介にアナロジーすることにも (スターリニズム史観)で唯一絶対の位置 (スターリニズム史観)で唯一絶対の位置 を占める生産力をほとんど捨象しているこ をも問題であろう。氏の構想する「反国家 の歴史的位相」を明らかにするには、この の歴史的位相」を明らかにするには、この とも問題を避けるわけにはいくまい。今 たる論考で、それらを理論のうちに取込む ととを明寺してい。

以上述べてきたことを別の側面からいえば、あくまでも両者の総合であることでま者が、その過程で試行を重ねているでた著者が、その過程で試行を重ねているでた著者が、その過程で試行を重ねていることは理解できるが、目標は、カッコよくととは理解できるが、目標は、カッコよくを忘れないでほしい。

を成功しているとはいい難いのである。 を成功しているとはいい難いのである。 を成功した地平の困難さを思わせてあまりある。結論に対する性急な判断は控えねばなる。結論に対する性急な判断は控えねばなる。結論に対する性急な判断は控えねばなる。結論に対する性急な判断は控えねばなる。結論に対する性急な判断は控えねばなる。結論に対する性急な判断は控えればなる。 として地平の困難さを思わせてあまりある。 がないが、方法的にもなお種々の問題が残るないが、方法的にもなお種々の間題が残る。 ととして、著者の踏がはながら、ライ

をえないのである。(九百円 太平出版社)をえないのである。(九百円 太平出版社)られるものではない。著者の一度踏み出しられるものではない。著者の一度踏み出しられるものではない。著者の一度踏み出しられるものではない。著者の一度踏み出しられるものではない。著者の一度踏み出しられるものである。(九百円 太平出版社)